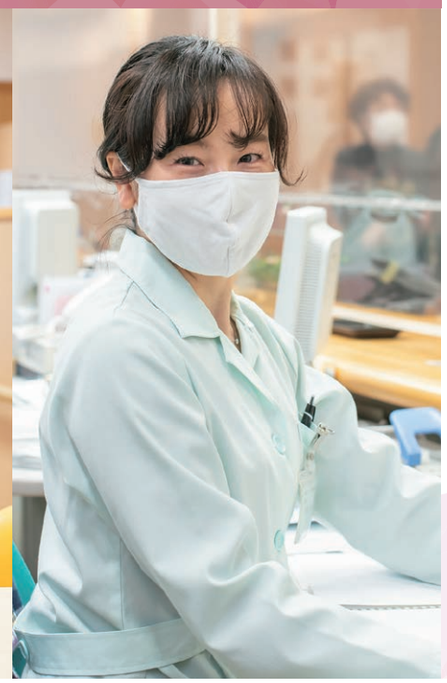
The 50th Years

岩室リハビリテーション病院
開院50周年

〈 特集 〉最終回レポート

わたしのリハビリテーション病院への想い



やさしさとしあわせを運ぶ「笑顔」あふれる私の大好きな病院

看護部
看護部長 榎本 千尋

岩室リハビリテーション病院が開設し、50周年となりました。看護部も共に歩み、医療や福祉の変化に合わせ変わり続けて来ました。

その中で、病院のやさしい雰囲気や職種の垣根を越えた人との交流、温かさは、先輩方が築き上げてくれたお陰だと思っています。

院内のあちら、こちらで見られる笑顔は、とても素敵で大好きな光景です。

私は看護師長を16年、看護部長を3年、合わせて看護管理を19年経験させてもらっています。何年やっても「ああ、こうすればよかったな」「力不足だな」と自己嫌悪と反省を繰り返しています。私には、「そこがだめなんだて」と正面から注意をしてくれたり、思いを共感してくれるスタッフがおり、一緒に頑張ってくれるみんなには、とても感謝しています。病院職員みんなと楽しく話をすることが私の原動力となっています。

これからもみんなが安心して働くことができるように、看護管理の知識を深め、信頼される管理者になれるよう励んでいきたいと思っています。

一歩踏み出そうとするときの不安に対して、ある医師から「できるか、できないかじゃない！やるか、やらないかだ！やると決めたら、どうすればできるかを考えるんだ！」と言葉をかけられました。その通りだ。いい言葉をもらったと心に刻みました。

新しいことをするのは大変ですが、できないかもしれないと躊躇していればそこで進歩がなくなってしまいます。50周年を迎えましたが、看護部はまだまだ発展が必要です。患者様や入所者様などから納得し、満足いただく看護、介護を提供するために、そして職員が長く働き続けられる職場になるように躊躇せず、踏みとどまらずに看護部100余名の人たちと手を組み合って進んでいきます。

『笑顔がやさしさとしあわせを運んで来るんだよ』というあるドラマでのセリフが大好きで、座右の銘としています。それを体現していて、笑顔があふれるこの病院に勤務させてもらって、よかったなと実感しています。

PROFILE 勤務歴24年。新潟市江南区出身。
趣味は旅行の本と公示を見ることと、弥彦線の列車が通るのを見ること。ストレスに鈍感な体質で、「アハハ」と笑って前を向きます。

The 50th Years

リハビリテーション医療の視点、「Lifeの三層」がある私の仕事場

私たち医療相談室には毎日様々なお困りごとの相談が寄せられます。他の医療機関や関係事業所から「こういった方の入院（入所）は出来ますか？」といった利用相談もあれば、入院中の患者様、ご家族から「今後どうしたら良いのだろうか」といった相談もあります。

人生の中で入院が必要な程の病気やケガはとても大きな出来事であり、身体だけでなく、心にも大きなダメージを負います。病気やケガをきっかけに現れる様々な課題に向き合う患者様を支えるために、病院では様々な専門職がチームを組んでサポートしています。当院の最大の強みは、各職種がそれぞれ多職種連携を深め、チーム医療の質の向上を図りたいと常に取り組んでいるところにあると思っています。

時に患者様やご家族からの相談が治療やリハビリの内容に関する場合もありますが、そんな時はすぐに相談・確認が出来、必要に応じて協働する、といった一連の流れがスムーズ、かつスピーディーに行えるという環境が、患者様が安心できる療養生活に繋がっているのだと思います。

最近では「Life（ライフ）の三層」と捉えられるようになりましたが、「命・生命＝Life」「生活・暮らし＝Life」「人生＝Life」のすべての視点が当院にはあると思っています。

患者様を生活者として捉え、これからの未来を共に考えるリハビリテーション医療の視点と重なる点が多いからです。

地域で暮らす人々を支えるためには、医療だけでなく、フォーマル・インフォーマルな社会資源との支援体制を構築することが重要となります。

今はコロナ禍の影響もあり、活動が縮小していますが、相談の窓口として地域社会の有益な資源で有り続けることが出来るよう、病院と地域を繋ぎたいと考えています。

これからも地域との関わりを深め、「岩室と言えばリハビリテーション病院！」と思っていただけるよう努めていきます。

PROFILE
勤務歴12年。新潟市出身。
趣味は散歩、ストレス解消法は長風呂。

「患者様への全力支援」職業人としての信念を育ててくれた、私の病院

私は岩室リハビリテーション病院から多くを得てきました。それは、経験と職業人としての信念、それによる患者様からの感謝の言葉です。それらが、更なる今後のモチベーションにつながっています。

現在、回復期リハビリテーション病棟に勤務しています。これまでは当院の通所リハビリ、訪問看護ステーションでのリハビリを経験してきました。各部署によって求められるリハビリは変化するため、対応する大変さはありました。

しかし、患者様のリハビリをする上で、現在だけのことを考えていては不足してしまいます。この後に起こる状況・状態を想定することが、患者様のより良い生活につながるからです。各療法士が患者様の今後を見据えたリハビリに取り組めることが、岩室リハビリテーション病院の組織体制における強みだと思います。

『全力支援＝すべては患者様の笑顔のために』これは、リハビリテーション部の理念です。この理念によって、私の職業人としての信念は育てられました。患者様との関係づくりやリハビリの効果が思うように出ないときも、すべては患者様の笑顔があることを願うことで、これまで努力を続けることができました。

私が頑張れる理由はその他に、先輩・後輩の存在と働く環境があります。リハビリテーション部は現在50名以上の大所帯となり、年齢では私自身も上から数えた方が早くなってしまいました。

知識や技術を教えていただいたことに感謝しつつ、それを少しでも後輩に伝えられたらと、そして、部の理念を体現する先輩でありたいと、強く思います。

また、片道1時間弱におよぶ通勤は大変ですが、角田山や弥彦山の春の新緑や、秋の紅葉を見ながらの通勤が大変さを忘れさせてくれます。岩室は、自然豊かで温泉もあり、ゆったりのんびり好きの私には最適な勤務地です。

これからも患者様の笑顔のため、自分自身も笑顔を忘れず業務に取り組んでいきたいと思います。

PROFILE
勤務歴17年。新潟市（旧黒埼町）出身。
趣味は旅行で、ストレス解消法はおいしい物をたくさん食べること。

The 50th Years

変化と挑戦を恐れず、進化し続ける病院と手をたずさえて行く

「家から近いし、お昼は給食が出るぞ」と上司に言われて、23年前、期待を胸に病院の医事課へ異動してきました。病院の先輩方はとても優しく指導してくださり、充実した毎日を過ごす日々でした。

しかし、平成12年に介護保険制度がスタートし、病院も一部が介護保険サービスに移行する事になりました。新しい仕組みやシステムに戸惑い、誰に聞いても分からない状態で、日付が変わっても帰れない日々が続きました。

その2年後には、新病棟がオープンし、医事課には新しいカルテ管理システムと医事システムが導入されました。連日の操作指導は集中するために手術室で行われました。

そして、平成18年には回復期リハビリテーション病棟がスタートしました。どんどん専門的になっていく診療報酬の算定基準は、今までの医療事務の範ちゅうを完全に超え、看護科をはじめ、リハビリ科、栄養管理科、相談室など専門部署との連携なしでは進める事は出来ませんでした。

医事課

医療事務

松本 直美

医療改正は2年おき、介護報酬改正は3年おきと、6年に1度は医療介護のダブル改定があり、新しい制度やルールを正しく理解する必要があります。

令和2年3月に介護病棟が介護医療院に転換する際には、ご家族への説明会を毎週開催し、安心して介護医療院に入所していただけるよう病院全体で取り組みました。働き方改革が進められるなか、業務の見直しや効率化を進め、残業を減らし、有休も取得できるよう、時間内に集中して業務を行っています。

病院の進化(変化)に引っ張られてきた23年間でしたが、各地での大きな災害や、コロナ禍と想像を超える変化が、しかも突然起こる世の中になってきています。

変化にどう対応するか、どう対応してきたかが己の人生にも大きく影響します。変化に挑み、進化し続ける病院を牽引できるよう、まだまだ成長したいと思っています。

PROFILE
勤務歴28年。燕市出身。
趣味は相撲鑑賞、ストレス解消法はピラティスを無心に行うこと。

遇(もてな)しのこころがお客様へ感動を届ける、日々実感する私の職場

通所リハビリテーション科

理学療法士

森山 裕幸

私が所属している診療部通所リハビリテーション科は、多職種で構成されています。リハビリテーション部・リハビリテーション科と違い、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士だけではなく、看護師・介護福祉士・社会福祉士等、様々なメンバーが集合し、協力して仕事をしています。

多職種連携が常に必要な部署であり、良い結果になれば関わった職員同士で一緒に喜びを分かち合える、そんな部署だと思っています。

また、介護保険分野で生活期に携わる職業として、利用者様と長く関わることができる部署でもあります。利用者様の中でも長い方では、10年以上のお付き合いになっている方もいらっしゃいます。

そのような部署で業務に携わる際に常に心掛けていることが一つあります。それは、「接遇」です。接遇という言葉の意味、「遇」という字は"遇す(もてなす)"と読みます。つまり、思いやりの心をこめて相手に接することを意味するそうです。その基本的なことを利用者さんに対して、自分なりに入職してから続けてきました。

医療従事者として新しい知識・技術を習得する努力に励み、質の高いサービスを提供することはもちろんですが、もてなす姿勢が伝わった時、さらにその効果は上がると私は感じています。

そして、もてなす姿勢は、直接利用者様に接している時だけではなく、むしろ関わっていない時の業務に取り組んでいる姿勢からも利用者様に伝わることが多いと感じるようになりました。

結果的に、日常業務において、利用者様に関わる関わらないの区別なく、もてなす気持ちを常に持ち、実行できる姿勢で業務に取り組むことがとても大切であると思えるようにもなりました。

医学協会の理念である、お客様に「感動」を感じてもらえる事ができる仕事とは、そのような姿勢で日々の業務を継続することにより、結果として伝わるのではないかと思っています。

私自身、「感動」までの道のりはまだまだ遠く長く感じますが、今の自分が少しでもゴールに近づけるよう、また、病院に携わる一人の職員として今後も努力していきたいと思っています。

PROFILE 勤務歴14年。燕市(旧吉田町)出身。
趣味の映画鑑賞と食べることは、ストレス解消にもつながっています。